

La Révolution, c'est le Je  
革命、それはわたしのこと



# 日本からみた 68年5月

Mai 68

西川長夫「パリ五月革命 私論 転換点としての68年」(平凡社)刊行記念

人文研アカデミー シンポジウム



写真撮影：西川長夫

68年革命は「私」が語り始めた最初の革命であった。そしてそのことは「革命」の概念を根底から変え、同時に「私」の概念も変えてしまう。それは新しい革命であり、既成の革命概念を当てはめて考えることも、既成の用語で語ることもできないだろう。「革命」であるか否かは別として、「革命」が問題であったのだ。(…) 私にとって五月はまだ終わっていない。

(同書「はじめに」より)

とぎ | 2012年2月5日 | 日 | 午後2:00-5:00

場所 | 京都大学百周年時計台記念館2F  
国際交流ホール

🎤 | 第1部 | 対論 「私」の叛乱

長崎浩 × 西川長夫

🎤 | 第2部 | シンポジウム 転換点としての68年

安丸良夫 上野千鶴子 伊藤公雄 中島一夫

総司会 市田良彦

予約不要・聴講無料



人文研アカデミー シンポジウム

西川長夫『パリ五月革命 私論 転換点としての68年』(平凡社)刊行記念

# 日本からみた 1968年5月



フランスの「68年5月」に立ち会った日本人留学生がいた。彼は日々、集会やデモに足を運び、ビラを集め、写真を撮った。本書はその生々しい記録であるとともに、その後、文学と歴史における彼の研究を深く規定することになった「革命」をめぐる、現在の時点からの問い直しである。フランスのみならず世界各地で起こった68年の叛乱は、グローバル資本主義の危機が囁かれる今日、様々な角度から再検討の対象となっている。あの「事件」はどのような転換を世界史にもたらしたのか、あれはほんとうに「革命」であったのか、そしてそのような叛乱がまた生起する可能性はあるのか……。日本とフランスの「68年」を交差させる西川長夫氏の著作は、この再検討に不可欠の視点をもたらしてくれるはずである。

(会場には西川氏所蔵の「68年」一次資料と氏撮影の写真が展示されます。)

## ◎ 出演者プロフィール



### 西川長夫

1934年生まれ。立命館大学名誉教授。専門は比較文化論、フランス研究。著書に『フランスの解体?』『日本回帰・再論』(以上、人文書院)、『国境の越え方』(平凡社ライブラリー)、『戦争の世紀を越えて』(『新』植民地主義論) (以上、平凡社)。



### 長崎浩

1937年生まれ。評論家。60年安保闘争に東京大学の学生として参加し、60年代末の全共闘運動高揚時には、「叛乱論」を雑誌『情況』に発表して運動を代表する理論家の一人となった。以降80年代まで政治思想情況にコミットする発言を続け、90年代からは環境問題やリハビリテーションの分野でも活躍している。最近著に『共同体の救済と病理』(作品社)。



### 安丸良夫

1934年生まれ。一橋大学名誉教授。日本の民衆運動史、民衆思想史の第一人者である。西川氏とは京都大学の学生時代以来、親交がある。著書に『日本の近代化と民衆思想』(平凡社ライブラリー)、『近代天皇像の形成』(岩波書店)、『現代日本思想論 歴史意識とイデオロギー』(同)など多数。



### 上野千鶴子

1948年生まれ。東京大学名誉教授、NPO法人ウィメンズ・アクション・ネットワーク理事長。社会学者にして、日本を代表するフェミニズムの論客である。近年では介護労働や社会福祉全般についても発言している。『おひとりさまの老後』(2007年、法研)はベストセラーとなった。最新刊に『ケアの社会学』(太田出版)。



### 伊藤公雄

1951年生まれ。京都大学教授。社会学を専門とするが、「男性学」の提唱と研究でも知られる。内閣府男女共同参画会議など、行政への参加も多い。イタリアのファシズムや60年代以降の左翼運動にも通じ、アウトノミア運動を日本で最初に紹介した。



### 中島一夫

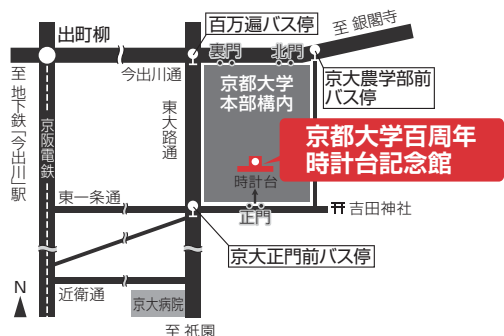
1968年生まれ。文芸評論家。近畿大学文芸学部准教授。2000年に「媒介と責任—石原吉郎の Kommunismus」で新潮新人賞評論・ノンフィクション部門を受賞した。著書に『収容所文学論』(論創社)。



### 市田良彦

1957年生まれ。神戸大学教授。京都大学人文科学研究所共同研究班「ヨーロッパ現代思想と政治」班長。本企画のコーディネーター。著書に『ランシエール—新(音楽の)哲学』(白水社)、『アルチュセール—ある連結の哲学』(平凡社)。

## ◎ 会場までのアクセス



○市バス「京大正門前」下車徒歩3分、または「百万遍」下車徒歩10分